



いぬせんずの

おこたて 空想犬

うたいぬ ゆね

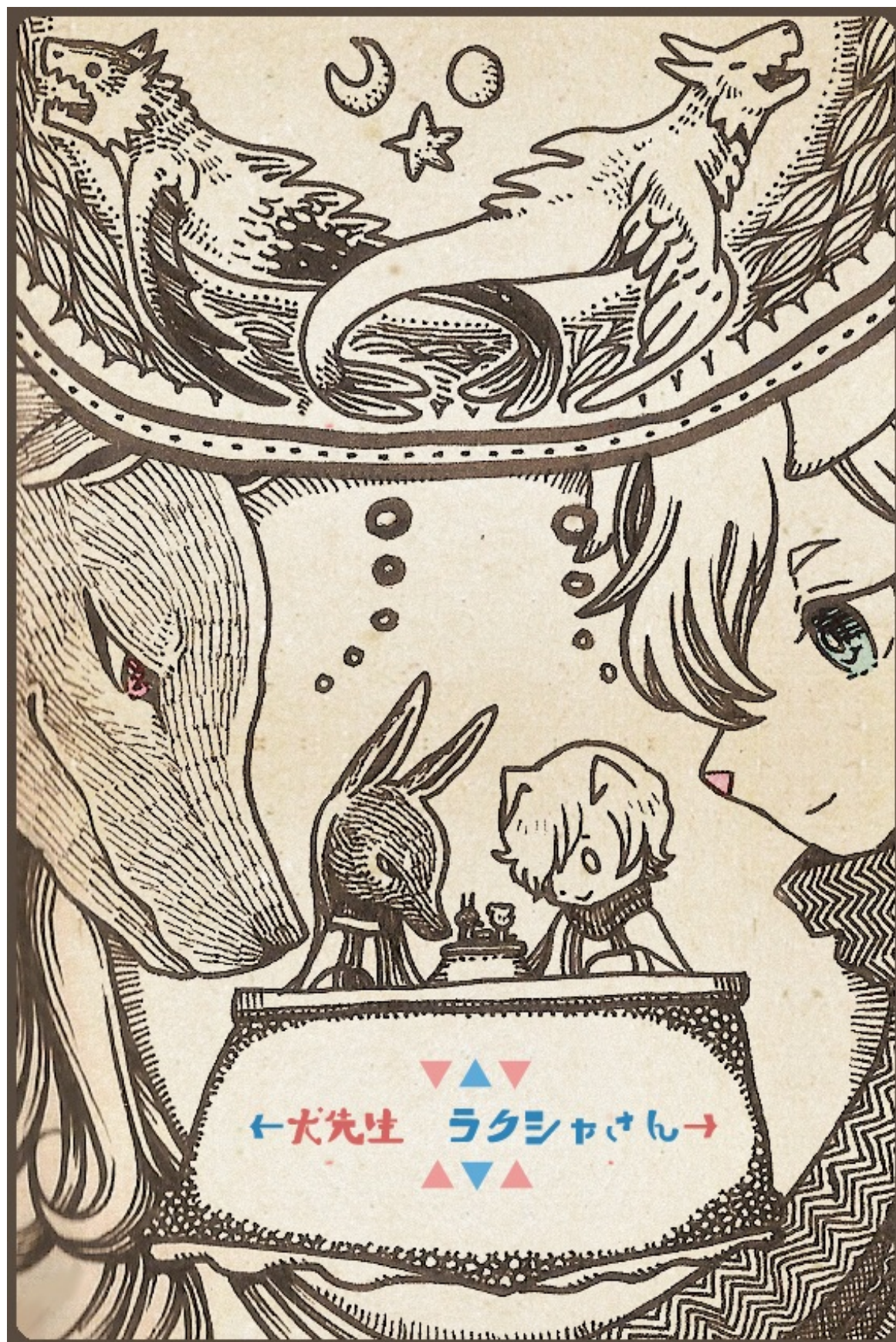
こたつといぬずと

不思議な伝説 あれこれ



世界中にある、
不思議な犬伝説 色々
記憶？欠片？ココにしみこみ

夢の奥 どこかの こたつで、
だれかがお話 はじめました…



(きゃらくた一犬ず ご紹介)

★犬先生

神出鬼没の、飄々とした黒犬型大魔法使い。夢の奥底に住んでおり、たくさんの兄弟姉妹がいるらしい。

人により、見える姿も様々。好きなものは混沌とお散歩、苦手なものは強い光と塩と洗剤。

☆ラクシャさん

生真面目で少し天然な白犬型図書館長。夢の高みの雲間の館に住み、光で記録される膨大な本の管理をする。料理と掃除が上手。好きなものは青空と雲、苦手なものは長時間勤務による腰痛と、暗い場所。



ちょっとおでかけ 帰ってみたら
過去・今・未来を見張る巨犬 立ちはだかった

足元には毒草と骨 蛇のたてがみ 竜の尾ふりあげ
射るように 鋭く睨む

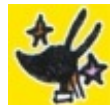
肝は冷えるが 対処はどこかで 聞いたことが
蜂蜜の甘〜いお菓子を愛し 極上の音楽で眠ってしまうと

かばんには さんどいっち と、音楽プレーヤー

果たしてこれで 通れるかな

そもそもこの先 わが家かな？

・ ・ ・



犬先生：やぁやぁお久しぶり、犬先生だよ。

ケルベロスおじさんとは古馴染みなのである。いやはや。



ラクシャさん：どうも、ラクシャといいます。

「ケルベロスにパン」は、わいろの諺だそうです。いやはや。



宇宙に犬さん 行ったという

地球に帰ってきた子もいて
そら未だ どこかの子も

宣伝される ひかりのかげ
見える以上の ものがある

見ず見たりとは なんと うそか

見えずを見るにも かげりがあり

遠い光の 闇間のきらめき
しかしなんと しめることか

見上げて ちょこん
愛犬 ちいさな舌だして
光る星 影の星 うかぶ銀河のどこか
見つめ くふんと まるく呼んだ

・ ・ ・



犬先生：呼びかけたら、何ぞ出てきた。



ラクシャさん：うあっコタツから幾千もの歯磨きガムがっ！



笛と 太鼓と 光うっすら
鬱蒼とした古樹ごしに
道のりょうはた 石の仔獣たち ちょこなんと

とくべつのしるしと、まよけのしるし
しめしているけど、左右がぎゃく？

右の仔 丸い頭かたむけ
尻尾をふって 前足をぽん、と

左の仔 鼻をぺろっと
のっそり立てど へたと座る

押したり かんだり うなって ぶつかり
ちいさなけんかの 意外な迫力

なにかだった 黒い子鬼が 駆け去っていく

ごろごろ ペロペロ へんてこ 二匹
落ち着き すんなり 座りなおした

通る仮面の翁さん 仔らみて 微笑む

でも おかしいな
右の仔 また わあと 開口
左の仔 また ふっと 閉口

くるくる ごろごろ もとは2種の なかよし2ひき
空気まで酔う ちいさな宴の宵にて

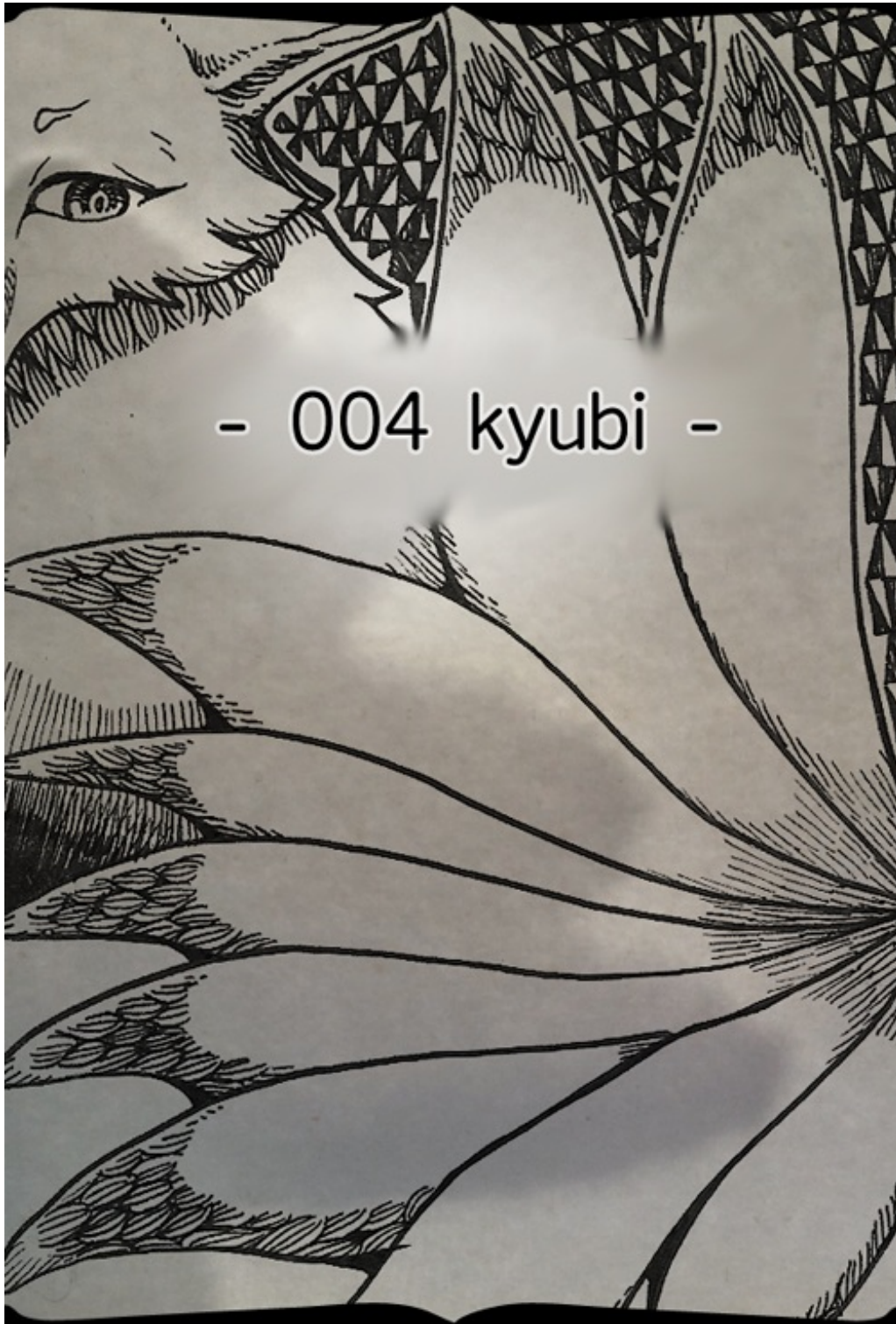
・ ・ ・



ラクシャさん：ぐるるふ...すうー



犬先生：（わいるどな犬科的寢息だなあ）



- 004 kyubi -

暗い路地に 真っ赤な着物の 妖しのひと
切れ長の瞳で微笑み みるみる奥へ駆けていく

不思議の案内 湧いた霧の向こうは金色の雲

野に光受け立つ姿 みつけた人は 幸のしるしじゃ と
諸国を旅し 美女に化けては 王たちをとりこにし
お山にしばし休んでは、古老の獣や木々と語る

まこととうそと幻想へのあこがれが 風とうずまき

気付けば 霧の野 紙と縄した 岩の上
九尾の透けた 大狐さん ふわふわした 尾をきままに
真紅の瞳 微笑むような輝き

なんぢ わがかげ いかにみえきや

暗い路地に尻もち 優雅だが どこかさびしげな声 響いた

・ ・ ・



犬先生：例えば私は黒い犬的な何かだが、何者かは混淆...アヌビス殿に似せた姿は、リズペクトコスのような物だし



ラクシャさん：その姿、こすぶれ だったんだ...また新たな謎がっ



厚い雲の下 荒野の夜に、鎖を引きずる音
迷い道の十字路で 黒い巨犬 炎の息を吐きつつ

しかし ふっと 鋭く赤い目 まるくなり
なんだ、久しいじゃないか と 意外な声

生まれた家 何かの跡地 見下ろす丘で
孤独の暇を 黒い衣の子と遊んだ
よもや 夜に彷徨う精霊さんとは
かわりものの 功名かな？

そういえば、と道をたずねた
どうもその家 帰れないんだ わかるかい？

ああ それなら 俺もわかるさ
なぜなら きみは...

真っ赤な丸い目 おやつを貰える 仔のような輝き



犬先生：私も昔、道を尋ねたことがあるよ。（不思議犬仕様のクッキー食べつつ）



ラクシャさん：ほんとうに神出鬼没だなあ、きみ（クッキーの小袋が開かない）



さあざあと降る水粒に おおわれた闇
ぬかるみを こころもとない 灯りひとつ

と 足元 じつとりと 包まれる感触
ぼんやり丸い灯りの下 丸いずぶぬれ ひつついている
毛は房になり 潤んだ黒い目 どこか底なしの 何ともつかぬ仔
小さな足で ようやと けんめいに 未知の声で 鼻をならし

世界 毎日 いろいろまれ たえていく
たえるむすうの ものたちのうち いくつかは
こうして怪に なるのだろうか

同じじゃないから しゃべらないから 少し変わった所があるから
賢くないとは たしかな条かな？

ひとぶんの、いきているぶんの、時代ぶんの、地方ぶんの、
まちぶんの、おやぶんこぶんぶんの、みそっかすぶんの、いえでぶんの いち

ひざではさんだ 電池切れそう 懐中電灯 照らされて
りょうてでだっこされた怪の仔 満足げなあくびして ばしゃっとこまかな 水の粒

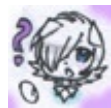
雨音 耳に戻り 呼ぶ声どたばた
ふっくらな手の きつい平手と はぐ食らい
言わなかった心細さの糸が切れ

どうどうと流れ出す あったかい涙の混じる闇

・ ・ ・



犬先生：ぶるるふ足寒い...コタツの温度、上げてはくれんかね？



ラクシャさん：え、さっき上げたよ？とりあえず、はいお茶。



山中 木造りの小さな家

外では遠吠え 中ではシチューの香りとお腹の鳴る音
暖炉に集まり 手をかざして ごはんのじかん 待っている

きょうはどうしたろうね やけに遠吠え きこえてくる
このごろはたいへんだから でも おまもり あるもの
生まれ持った 牙と、爪と、夜を見る眼 それに耳

くるしみもだえ 獣の姿に変わる人
いつからか どこからか

ある地ではおばけ ある地では戦士の力
故郷の山々は素敵だけれど
目ざとい大勢の「正義」が 減りゆく種族 追い詰める

でもかれらには ひとの忘れた力が宿る
野山飛び駆け 眼をひからせ
唸り吠え飛び掛り 戦い 守り 失い やっと得る
昔は大群 いまや どれだけか

だからこそわかる だいじさもまた

ひげもじゃ ぼさぼさ 葉っぱとすり傷の とうちゃん ご帰宅
おいしげなおみやげ もって帰った
子らはすっかり仔狼 転げてはしゃぎ お母さんも 尻尾ふってる

山中の家から ちっちゃな 遠吠えがっせんと 煙突の煙

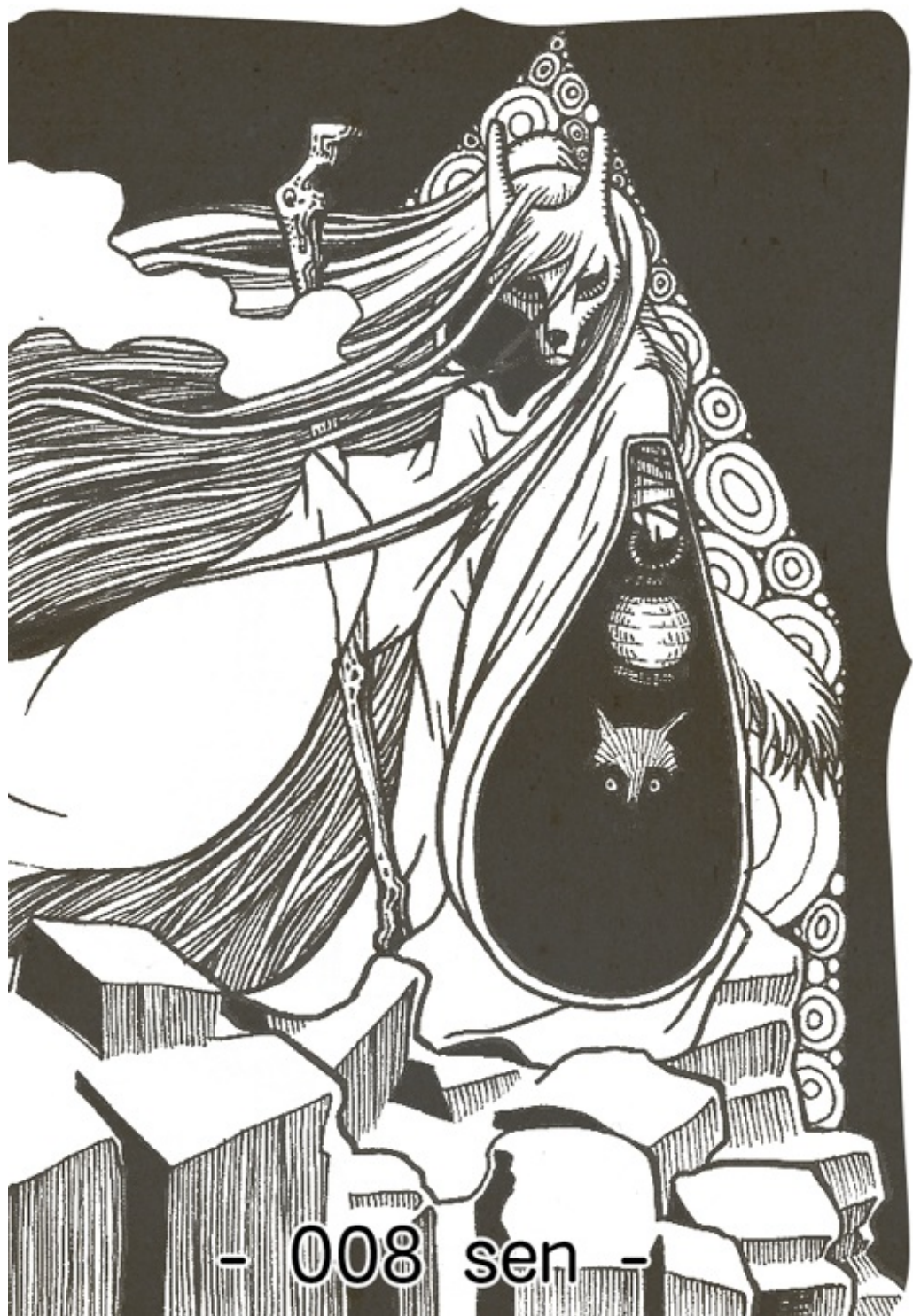
・ ・ ・



犬先生：ふーっうまそうな ODEN である！がつがつあついあついっ



ラクシャさん：ほらほら、猫舌なんだから気をつけないと。



叩きつけるように吹き抜ける 風の峰
おとなしい犬と髪の長い人 座っている

犬 土ほじくれば 人 呼吸を長く整え
くねくね寝そべるそば 舞うように歩き
ごはんの食材 こだわって

百年ずつ 経るうちに
二者はだんだん 雪色に変わり

すべてがうつろう空しさと
生きる雲を呼び 乗って空を行く術 心得た

めざすは角の山
早く仙になりたくて なれなくて 闇に墜ち
暴れる巨怪となった教え子 鎮めんと

まだまだ ずっと 未完成
しかしだから こやつと どこまでも

では 参りましょう と振り向く
白の豹紋 赤い星を額に得た金眼の犬

・ ・ ・



犬先生：いまこの コタツの中には、何が入っているでしょうか。



ラクシャさん：さて何かな...あれ、どこにも足がつかない...



今宵かね？
すまぬ、それが急用でね
寝ずの番を せねばならぬて

中に？いやいや、何もおらんよ
巢でも掘ろうと思うてな
ほれ、じき白い大将がおでましになろう

おぬしこそどうしたね 立派な牙 むきだしにして

縞模様も その眼も 私より鋭きこと 知っておるわい
さあさあ、鬼市の宴 存分に楽しんでくるとええ

さてお嬢さん、縞々の猛き子 行ってしまったよ
しかし感心だなぁ、木の虚に泊まる守りを
土地の精霊に 頼むとは 若いのによろしく知っておった
まァ、じいさまは留守 私しかおらんのだが

...ところで、その杖と がいこつ どうしたね？

・ ・ ・



犬先生： 私の腹宇宙が、こたつに最適な果実をくれと言っておる...



ラクシャさん： 不思議犬仕様みかん なら、さっきので全部だよ。



木々の覆い隠す 池の中まで 柔らかな日差し
幾重にも咲く 水中の花々から
藻と鱗だらけの石が ひれと尾をぴんと 伸びをして
緑色の水犬の 泡のぼる おおあくび

仲間とぶくぶくごうごう おいかけっこ
こざかな たにし えび こがに かえる
水の乙女さんは 金と銀の何か 磨いていて
ぬしさんは 何万年かの 夢をみている

へとへとになり 暖かな日差し届く 沈んだ石の台の上

犬ず おしくらしつっ ひなたぼっこ
古い石 なんだろう なにか絵が 彫ってある
水の生き物 ずらりのそばに、半人半魚 見慣れぬ民族

陽の線 おどる 忘れ去られた 森の池の深みに
水のものたちの棲む 壮麗な神殿遺跡



犬先生：私は夢のあちこちに、生きたヘンテコ宮殿を造る...そばから、逃げられておるのだ。



ラクシャさん：僕は雲間の図書館に住んで、記憶の仕事もしています。（って どなたへの解説だろう）



オリンポスの神さまが 飼っていた犬さん 英雄が借りた
絶対に どんな獲物も捕らえるという 見事な猟犬

つかまえたいのは、不敵な狐さん
絶対に どんなものにも捕まらぬという 神さま育ち

犬さんたちまち 猛烈に追い 狐さん軽々と 跳び駆け
鋼の息し 尾を振りわけ がっしり すらりとした脚を運び
2頭 なかなか 捕まえきれず 捕まりきらない

絶対 と 絶対 どちらが ほんとう？ どちらか うそ？
古代世界のかたすみで ひとときの永遠を作る 捕と捕
そこに それぞれのいみ なんだろう？

ふうむ と 雷霆の方 雲の下へ 手をかざすと
張り切って走った2頭とも つるりと綺麗な 大理石

そのうち おおいぬの星座 その犬さんという

冬の星空に染み入っていく どこかの遠吠えの声

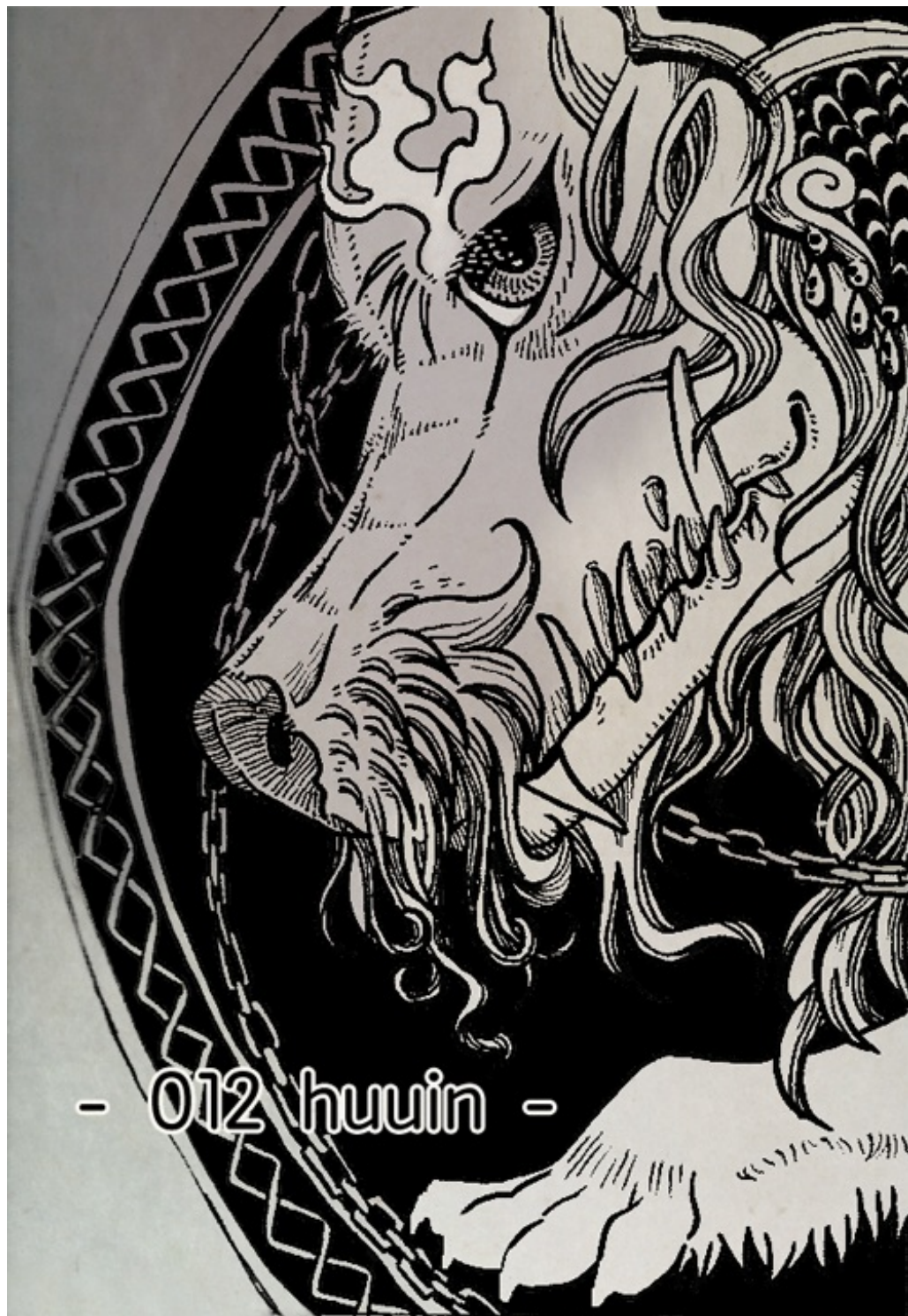
・ ・ ・



犬先生：ほおう、たしかにどちらも互角...



ラクシャさん：そこ！コタツの上で ちっちゃい剣闘士 戦わせない！



川沿いの 異様の風吹きだす 洞窟
狩人の犬さん なぜか気になり 岩穴の奥へ

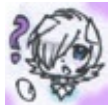
舌で息をし 突き当たった地の深み 噛みあう岩の間に
鎧の覆う 神話の巨軀を見た

飛び上がったが逃げ出さず 鼻に皺よせ 尾を払い唸ると
重低音の静かな笑いと 語りかける声

口笛にこたえて 飛び出してくる狼犬さん
どうした、と肩をなでられ 嬉しそうに ごつごつの手をぺろぺろ
雪深い平原 空を横切る黒い狩猟団を見上げながら 父母の待つ村へ

犬さんが 少し浮いて走っていることに 今はだれも 気付かない

はての日 放たれて自由になり 混乱を食い駆け 滅ぼさる事 自ら知る
封じの伝説者から 気まぐれに与えられた 鉄の森の息吹



ラクシャさん：その装備、どうしたんだい？



犬先生：寒冷防御力を誇る魔法鎧である。おおっしかし背中搔けないっ



灼熱の昼と、氷点下の夜
さそりは去ったが 足は石

大布かぶり 岩陰にもたれて
震えながら 目当ての星を探る

闇の雲の草をたべる 幾頭もの光の羊群
その手前 すいすいと 何かの姿の風が吹く
とたんに だれか どこかで倒れた
らくだが 驚いて鳴いている

長い息ひとつ 妙に落ち着いた気分で
斜めに交差した二対の翼の 黒鷲頭の人影を見る
その手から広がる 苦しみの煙

富と帰るもの 名すらも忘れられるもの
どこか遠いことだった 流行の噂で腹はふくれぬ
みえるもののみ 貪欲に踏み荒らし 余興に興じる灯火のかけ
暖なくも こころの灯火忘れぬひとびと 青い部屋の 虚ろな夢
ひざにあごをのせ まるくやさしい目をした老犬

煙 忘れられるものになる間 今までが長すぎる詩だった気もし
しかし ぼんやり眼が覚め 黒鷲のひとがいない

神話のように 地平にのぼる 圧倒的な光と熱の眼の手前に
衣たなびかせ 空中に立つ 何かの姿の風

旅人達の 旅またはじまる
遠くと遠くの はざまの砂漠にて

・ ・ ・



犬先生：砂漠にコタツがあったら、夜も助からう、生物も巣にしてみたりなあ



ラクシャさん：うん...昼は違った意味でトラップになりそうだけど...うう、しかし あったかいっ



暗黒に「5つめの太陽」を今こそ創ろう
その想いのもとに 光と熱の珠 育つ
羽飾りの 金飾りの 数多くの仲間
次々 激しい光にのまれ 熱に焦がれ

燦然たる 魂の灯は成った

しかし 見上げる共は既になく
眼からは滝のような 落涙
目玉も流れ出すような

夢の奥か いつかの欠片か
密林の向こうへ沈む 真っ赤な夕陽を
だれかが押して 送っていく

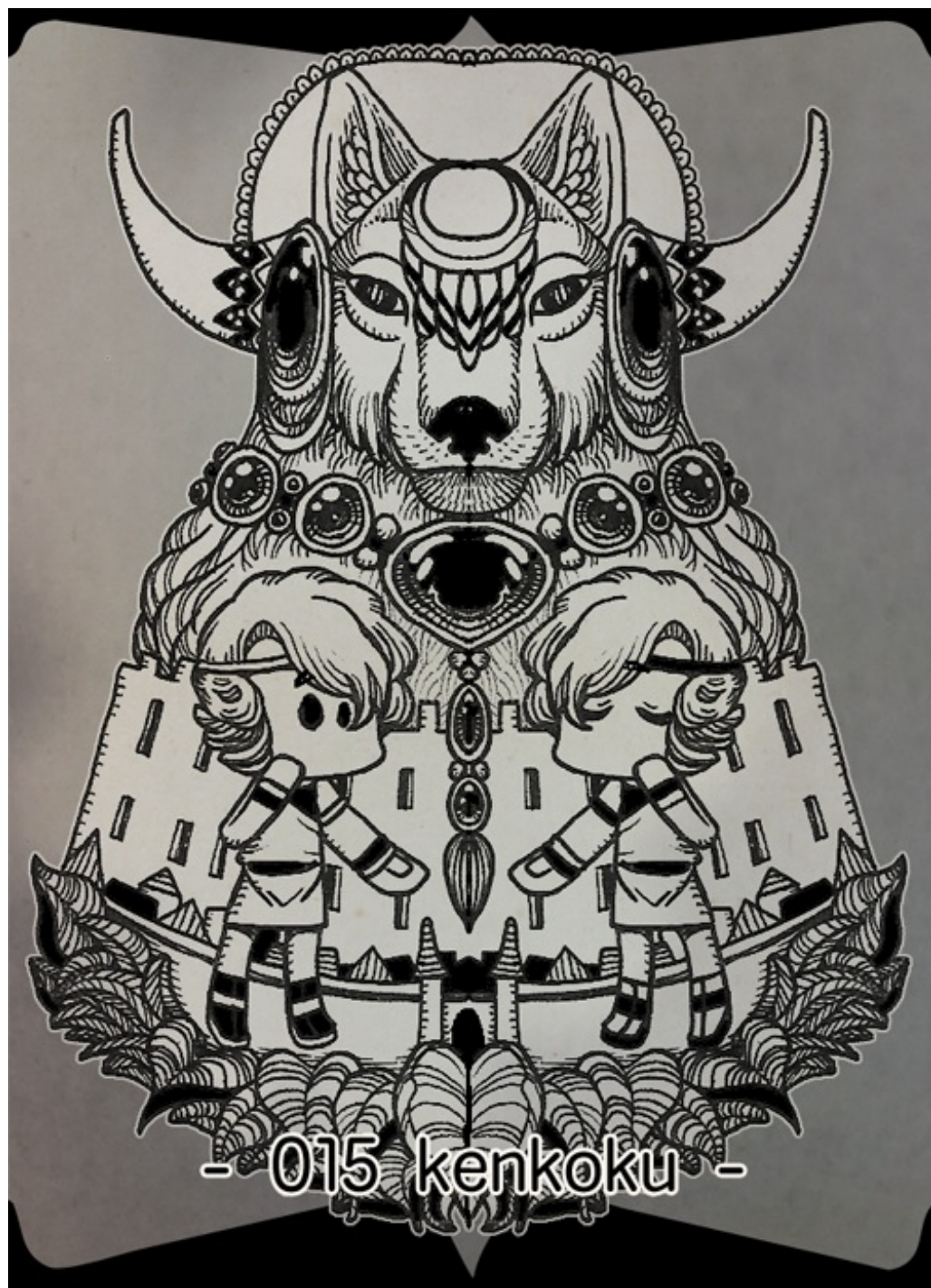
・ ・ ・



犬先生：見たまえ君。コタツの内部の色の、やや夕陽のごとき色あい...へっくしわおん！



ラクシャさん：すっかり気に入ったんだね、おこた。



森の岩場から 川をみてみた
虫の声と静かな丸い光 水面に

おや なにかが ふたつ
何の力か 沈まぬ籠にゆられ

脚を伸ばして立ち上がり
小石けちらし 駆け下りて
くうん?と 首を かしげた

ずるずる 大泣きの籠 牙並ぶ口で引っ張りあげ

かくされたふたご　くるんで眠った

たなびく旗　白い2つの城　勇壮な鎧の兵士達の夢
険しい顔で鼓舞し　見事な剣を振るう王たち　誰かに似ている

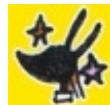
すっかり　守るつもりで　滋養を与え
寝息を聞いて出た狩りの間に　狩人がみつけた

籠の子ら　あぶない
狼にでも食われんように　おれらでつれて帰ろう
おお　大粒の涙　怖かったろうになあ

雲間の精霊　名残の力やどる　狼のからだ
夕陽に輝く夢のような草原に　命の糧を狩らんと

のちの　栄華と儚さの帝国の丘にて

・　・　・



犬先生：ラクシャ君、君の尾のふわふわ再現素材を全身に着てみたが、どうか。



ラクシャさん：うん、羊です。



いつからか でもたしかに
その姿 かつて山野に

呼吸をする 山々の気が
その姿 いくえにも たがえてうつす

畑仕事 背筋を伸ばしその先の
薄暗い森の境に 静かに光る眼を見た

障子がことこと震えるほどに
ものすごい 吠え声 聞いた

夜 光る雀をちらちら連れた
緊張の威風を背に歩く
転んでしまえば もう帰れない

うなっていた歯の間のとげ ぬいたら
恩返し してくれた

なかよし ころころ たわむれる
やんちゃで小さな ずんぐりさん達
いとしげに 見守り 世話する 対

守りに払い 千匹通り
すみかに えものによわりかぜ
減っていくさま めにもあきらか

のちに聞かれた 吠え声は
おーいと呼ぶげな 響きと聞いた

そこに 姿 あったこと
そこに 今 いないこと
せめて こころの うちには

点灯したまま 停まりきりの車の前
口をばくばく かたまる目の前
眩しそうに 犬ではない何か
闇の藪に 横切って きえた

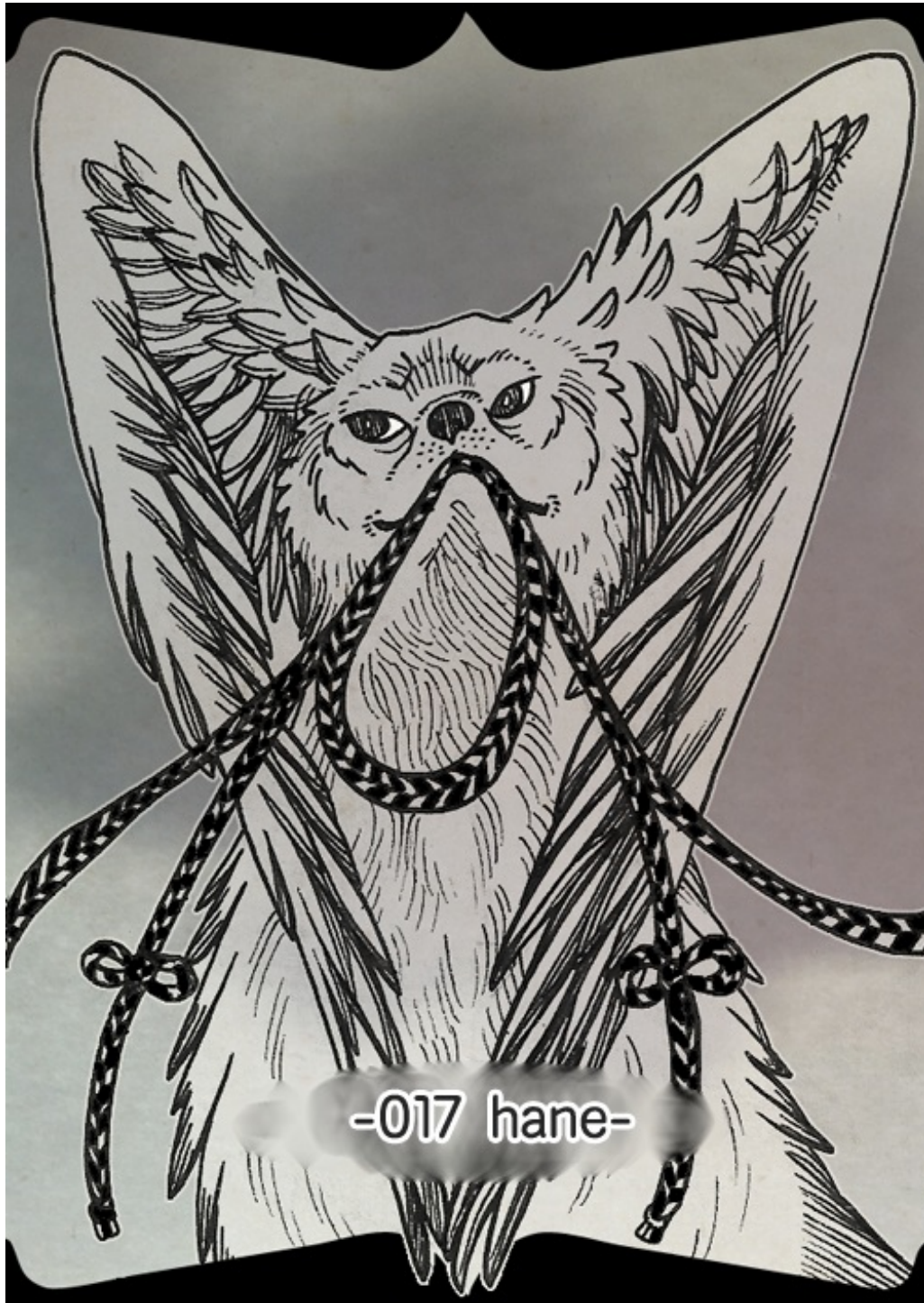
・ ・ ・



ラクシャさん：「おおかみのまゆげ」というお話も、あるそうです。



犬先生：私にも1，2本ずつ不思議犬の眉毛があるが、はて...



おはようおはよう、と 顔をぺろぺろ
いつもどおり跳ね回る 元気な かぞくっこ

いつもと違うのは 小さな翼が生えていること
ぼうっと 柔らかい羽毛を眺めていたら
空のお皿くわえ 転がしながら持ってきた

かつて どこかの街道で
羽犬 あばれまわったという
その牙 強靱さ 空行く力で

ざらざらと どっぐふーど 水の皿も満たし
飛び掛らずに 待てるかな？
上手に出来たら、よし！で ごはん
その間に ばたばたと こちらも朝ごと

かつて 羽 得たような俊足の
お殿様の愛犬 いたという
だいじにだいじに とむらって
りっぱな塚 今もどこかに

支度の間の ひとときに水
尻尾ふって 自分でリード くわえてきた
そうだね これ持ったら お散歩だ

黒い宇宙に出来た 新しい白色の町
まだ飛べないらしい翼をみて
先の心配 今の ほっこり
今までの 愛らしい失敗 思い出し 歩く

くんくん空を嗅ぐ 先 過ぎた 流れ星

・ ・ ・



ラクシャさん：わふふ...ぐう （しっぽ振りつつ）



犬先生：ラクシャは寝つきが のびTくん並みなのである。ふああ...（流れ星出しつつ）



きらびやかな宮殿 謁見の間に
文官・武官 居並び 装飾の玉座に皇帝さん
の間に1列 緊張している一団

使者を見おろす 立派な髭の君
珍しい鳥獣が大好きで
本日の到着にも 内心胸を躍らせる

金飾りの赤い綱に ひかれてきたのは 黄白色 のんびりとした 大柄の馬
いえいえ お顔は 耳の垂れた犬さん

なんでも 日に千里駆け 耳はききわけ 眼は宝玉
吠える声は敵軍を戦慄させ 背に乗らば寿命が千年 伸びるとか

しかし 背に乗り損ねれば 逆に寿命が 縮むとか

遠域の思惑か 贈られた宝か
はみ を はみはみ 犬馬さんは

故郷の仙境 雲間の青い絶景を夢に見て
蹄こっこつと 鳴らし 御者に笹竹 生やしている



犬先生：ハア〜ツ……あ、それっ によろによろ



ラクシャ：だからコタツに そういったもの生やすなというにっ！



野のはずれに 緑色の犬が立っている
見える人あり 見えぬ人あり

お天気の祝祭の たるんだ昼すぎ
妖精の飼い犬 と だれかが言った

どうもうだけれど 彼らと野歩き
そのときだけは 安全だって

緑色の犬 野の中に来ている
くつろぐ人々 見極めるように

網で蝶採るひとがいる
めずらしくないと 放るように 網を振ると
翅よろよと空へ どこかへ

今日はやけに 蝶が少ない
この間は ここらにいないはずのを
沢山捕まえ...

鼻すぐ近く 薬花の香
からみあう草花の毛並みをした犬が
音もなくその人 抱え込む

やわらかい弧で 高価な網が倒れる頃には
環のような草跡のこし もとの花野

あ、妖精の環っか できてるよ

みえること みえないこと
しっていること いらないこと
眠たげな昼すぎの 死と生をいなく くさはら

・ ・ ・



犬先生：ふーむ、わが腹宇宙 なにやら ごろごろとっ...



ラクシャさん：はい、腹（宇宙）巻きと 甘くないヨーグルトです。で、なに食べたんだい？



舌で息し 黒い眼を輝かせて
旅人とともに 犬が歩く

かつて旅には同胞がいたが
絶景に まみえるたびに
一人 また一人 根付いていった

熱帯の密林 砂の海のオアシス 雲を海とたなびかす山々

旅の犬にも同胞がいたが
根付いていく人々ごとに
一頭 また一頭 ついていった

青々とした海原 雨の島々 雪深き原野 風吹き荒れる星の荒野

また密林 鳥や獣の声に眠り かきわけるように巨大な葉の間抜け
沖で大鯨の跳ねる海 行き止まり 眺めた

背で 大きな機械の音がする
かぞく どこかで まつだろうか
ごはんのときには わらうだろうか

うしなわれるもの うまれていくもの

できなかったこと できるようになったこと
そして もうにどと できぬこと

舌を出して 宇宙のような瞳 見上げている
あまえるような ものがないような まばたき

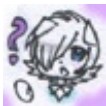
うん そうだね ほんとうにありがとう
さて、これから いっしょに どこへ？

見上げた空は既に夜
赤黒い雲が 月星 覆い隠し
しかしわずかに透けている 巡るものの 光彩

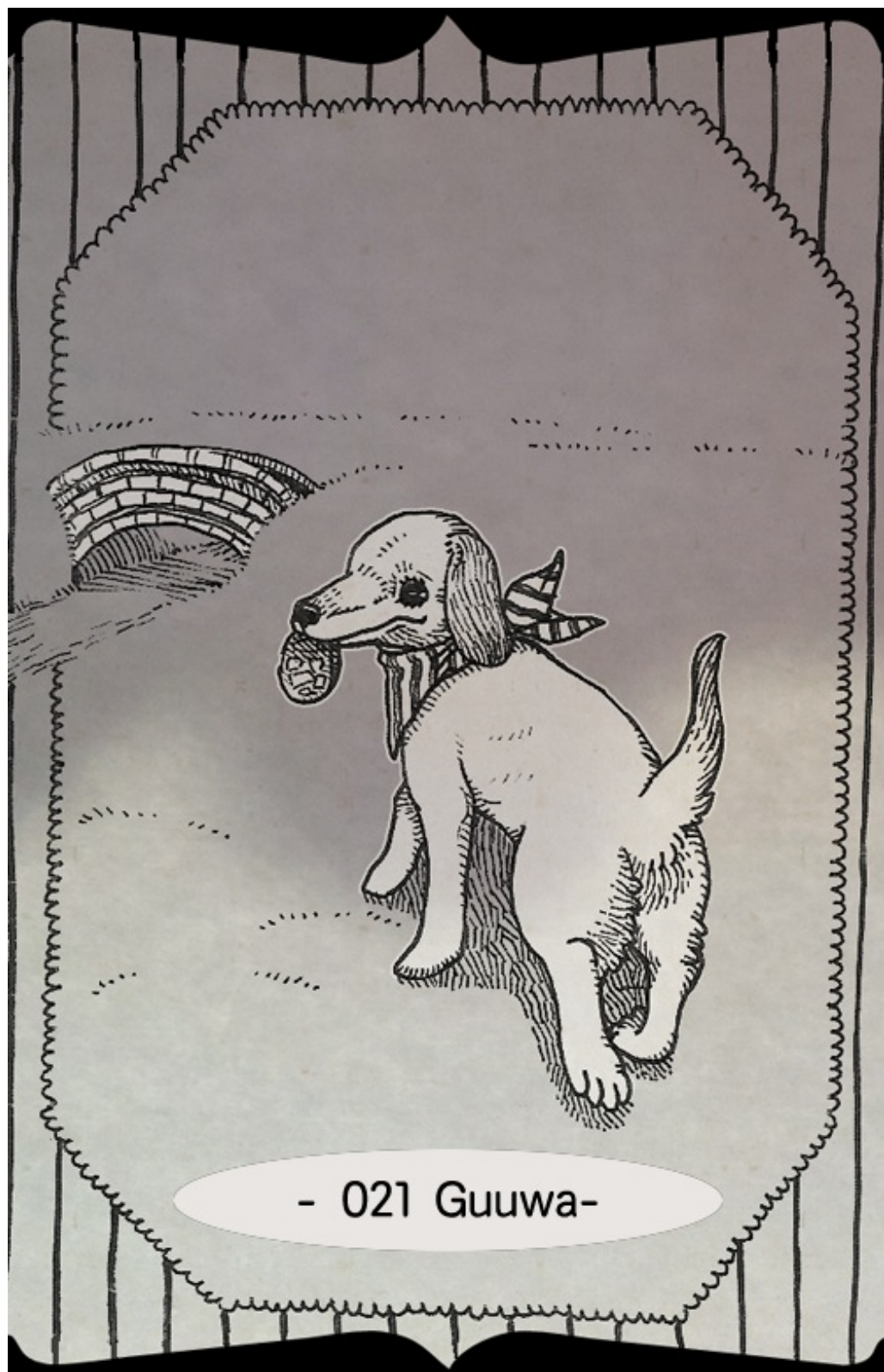
・ ・ ・



犬先生：我が毛並みには、星々と目玉が跳ねているのだ。



ラクシャさん：目玉さん1個 とんできたよ？



お祝いの日　おいしいハムもらって　ごきげん
しっぽふって　とことこ　あっちとこっちと

広いお庭　落ち着くところで　食べようと
くんくん　みわたす　飾りのあいだ

植え込みの木陰　どうかしら

おや、りっぱな 黒服の人
うそのおはなし していたよ

トナカイさんのランプの陰は？
おや、元気な色の服の人々
みんなでだれか 泣かせて笑った

ぴかぴか飾り まぶしくてわくわく
でも、あご つかれてきた

お屋敷の子 溜息か 微笑みか
誰もいない白いブランコ ぶらん
一角獣のぬいぐるみ よいしょと抱え

お歌 聞こえるね
わたしは はむを食べに きたよ
みんな たのしげだね
だからね ふわふわのおじいさん
きみにも はむ くれるとおもう

そこで食べようと 足元 座ったら
小さな橋 みえた

お庭に川や池を作って めぐらせて
なにもみえないかな なにかみえるかな
とっとこ走って ききっと止まって

水みたら わんこがいたよ
おんなじように はむ持って
きみも なんだね！そこにもいたね！
わん！といったら

ぶくぶく はむ 沈んでいき
むこうのわんこも もういない

しばらくほえてみたけれど やはりおなかがすいてきて
座って ぶくぶくいうのを みてた

ふる ふる...と ゆれるしっぽ
そのうしろ 赤い服の ひとじゃないだれか
毛むくじゃらの手で 何か 置いていきました

ぶうぶういうこ だまっているこ わんわんいうこ
皆の眼にうつるせかいに 冷氣と 可憐な結晶



ラクシャさん：よーし、ケーキも準備して、と...アレ、犬先生～？



犬先生：（この空間には煙突が...仕方がない、このままコタツ内で待機だ わふっ楽しい...）



久しぶりにじっくり雲を見上げると
大小の犬 寒気と日差しの中

やんちゃな一匹 大きなせなか 登る
甘えんぼな一匹 もったりした 脚を あまがみ
のんびりな一匹 その脚まわりに すやすや おなか

ほこっとしたのも 久しぶり
こころでしずかに 呼びかけてみる

お〜い　ころころ　かわいいね
おそら　どうだい　あったかい
いろんなもの　みえるかい

きりっと記憶　久しぶりに　思い出す

黒いぐらいの　陰路の家屋のならび
みあげたとき　そのときも

雲の犬　勇ましく　柔らかげに
電線ぬけてく　風つれて　空にいた

うまくも　よくも　どうなってきたか
ただ転がり来た　だけかもしれない

でも　また会えてよかったよ　と
ねじれた空き缶　たしかに　こここと笑った

去るか　帰るか　お散歩か
遠ざかっていく雲の犬の　振り返った　青い眼

・ ・ ・



犬先生：ほっほっほ。やぁよい子よ、おじさんがプレゼントをあげよう。



ラクシャさん：（クウーツ犬先生そっくりになれる　かぶりものセット...!）



岩間からたえず流れ落ちる清水をみて、ぼんやり のひと
青緑色の滝つぼ深く 底は知れない
肌がぴりぴりする冷気いっそう そのとき

にわかに水面泡立ち 白い光 まどろむように 次第に近く

自然とどこかのはざまより 未知来たりて ときにまみえる
それがどこか別でなく よもや いま こことは

鼓動激しく でも動けず 眼をつぶる事も 光は目の前
強く鈴の音 短く鳴ったあと

両手に乗るほどの 白い超常の動物 鼻をこすって
硝子のような青い眼 鳥のような桃色の手足
赤く渦巻いた翼と 細長いからだ 水色の鰭のある尾

前脚べろべろ おわって 両の眼きりっと そのひと見つめる

そなたには まばたくま ながら せわになった
これ このたま もてゆかれよ

くわっぺっと 清水とともに はきだした 澄んだ色の玉
仔竜は雲湧かせ まとい 瞬く間に かなしいほど青い空へ
風の名残が 傷に優しく こころのひびにも

穏やかな目をした大好きな老犬 ここがお気に入りだった
水のごうごういうのを見ながら へはっと
よもや たくさんのなか そんなことも あったとは

空へ昇って 大きな姿に なるだろうか
またこの水辺に戻り のんびりと宿るだろうか

手の中 泡色まんまる 振ると幽かに 鈴の音がした

・ ・ ・



犬先生：んふふ...ぐうぐう ごるる...



ラクシャさん：さてさて、僕からもこれ 置いておこうかな。



生きたような黒い煙 もんやり広がる秘密の地下室
次第に見えきた姿は 見事な翼を広げた 蛇の尾の黒獣

でも それが本体とは 限らない

呼び出した人 飛び出しそうな鼓動を隠し
数々の質問をするために 人の姿になってもらった
獣は雌のかたちなれど 変わった姿は ざらりとした眼の 屈強な鎧戦士

どちらが本当かは わからない

長年学び そして 踏み外し それでも渴望した知の疑問を
誠実に ひとつひとつ答える 黒髪たゆたう魔の声だけが
鐘のように 頭蓋に染み入っていき

供物を持ち 消えゆく姿の 威厳と優美 射る眼の微笑み

憧れた絵画の 翼の人に 静かに立つ犬に どこか似ていた
いそうなほどに緻密なのに どうしても どこにも

なにが正しいか ころころと裏表
しかし 儀式終わり ぱったりと倒れたままの 恍惚の人
もう二度と かわらぬ殿堂を そなえてしまった かもしれない

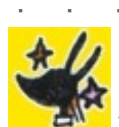
こころうばわれ 目は虚ろに姿を描き 耳はいとしの声のみ響き
はかなく熱い涙に 奥底からの笑み そのひとだけの偶像

野山の村に 幾重にもつらなる空より 静けさの陽光

きづくも なしも ひかりありて かげもまた
なにがけがすか なにがすくうか
どちらなのか どうすればいいのか
だれもよくはしらないまま しっているという

そして それすらも 宇宙の片隅 粒の粒

どこかのはずれで白牛 だれにともなく 鳴いた



犬先生：ああ私は ときに混沌魔法を夢中にぶっ放すが、魔物とはまた なぁ ごくごく ういっ



ラクシャさん：（あげた 魔法たんぶらー に 何を入れてきたんだろう...）



雪雲を白い海とする峰々の間に うまれた

五色の旗勢いよく はためき 風の馬たちが空を舞うのを
先程まで じゃれて遊んでいた 犬さん みあげる
まるで何か 思い出すように

祈りの巻物のくるま とことこくるくる 回したこと
すらりとしたからだで えものを追う足裏の 石がちの地面
どんな小さな音もききわけ なだれ 悪徒 知らせた吠え声
しなる筋肉と牙と爪 力ふるい 戦い守った傷

しあわせ くれる と笑って 背中をなでてくれた顔

ふしぎと どれも 記憶の中
かつての自己の こととして

どこから きたの？ どこへ いくの？
目からあつい水 でてる でも
ぼくの肩 なでて ”たしでれ” てわらった

白く ふしぎな宮殿 のぞむ 高山の街
色とりどりの 青空お土産屋さん
足にじゃれて遊ぶ子は

転じて生き いつかのどこかで 出会ったこと
ずっと覚えているかもしれない

どこから どこへ どうして だろうか
ときをこえ かわらず うつろい それでも
人懐っこい あたたかな瞳に

風ゆく 濃い青空と かなしいほどの微笑み

・ ・ ・



犬先生：あれ...このような日、前にも何ぞ あった様な...もぐもぐ



ラクシャさん：僕ら夢の奥では千年以上生きてるし、あったかもしれないね もぐもぐ



最初の暗闇 最初の男女
そしてそこには コヨーテがいた

ここは暗いし おれたちだけだ
そうそう 旅立とう 何か面白 あるはずさ
コヨーテたちは 歩を始めた

まず着いたよ ぼうっと薄灯り 照るところ
たまに お昼 たまに夜 黒と黄色と青と白

いやはやいろいろ でもまだ せまいな
そうそう旅立とう 何か面白 あるはずさ

山と湖 麗しい世界に 水の怪物 葦の種
ぐんぐん どんどん 伸びていく
川と平原 広い世界に 矢の様な暦過ぎるところ
こころ ことば はぐくみ とびかい

水 風 月 日 火 星 雪 季節 満ち欠け
英雄 雷 死 怪物退治 怒ったり喜んだり 長いながい 旅

ひとといういきものの 原始の踊りのような神話
かきまわしつつ おどけつつ うたい はねて
知っていくみちゆき いっしょに まみえた

都会に出ようと 慣れない笑顔で ひっちはいく
すけっちぶっく持って 赤土の サボテン荒野

どーんと広がりはじめた夕焼け色の中
怖いほど真っ直ぐ一本道ごしに
にへへと笑うような一頭 たくましく跳ねてみせた

遠く高く 歌いあう遠吠え 目にしみる 星々

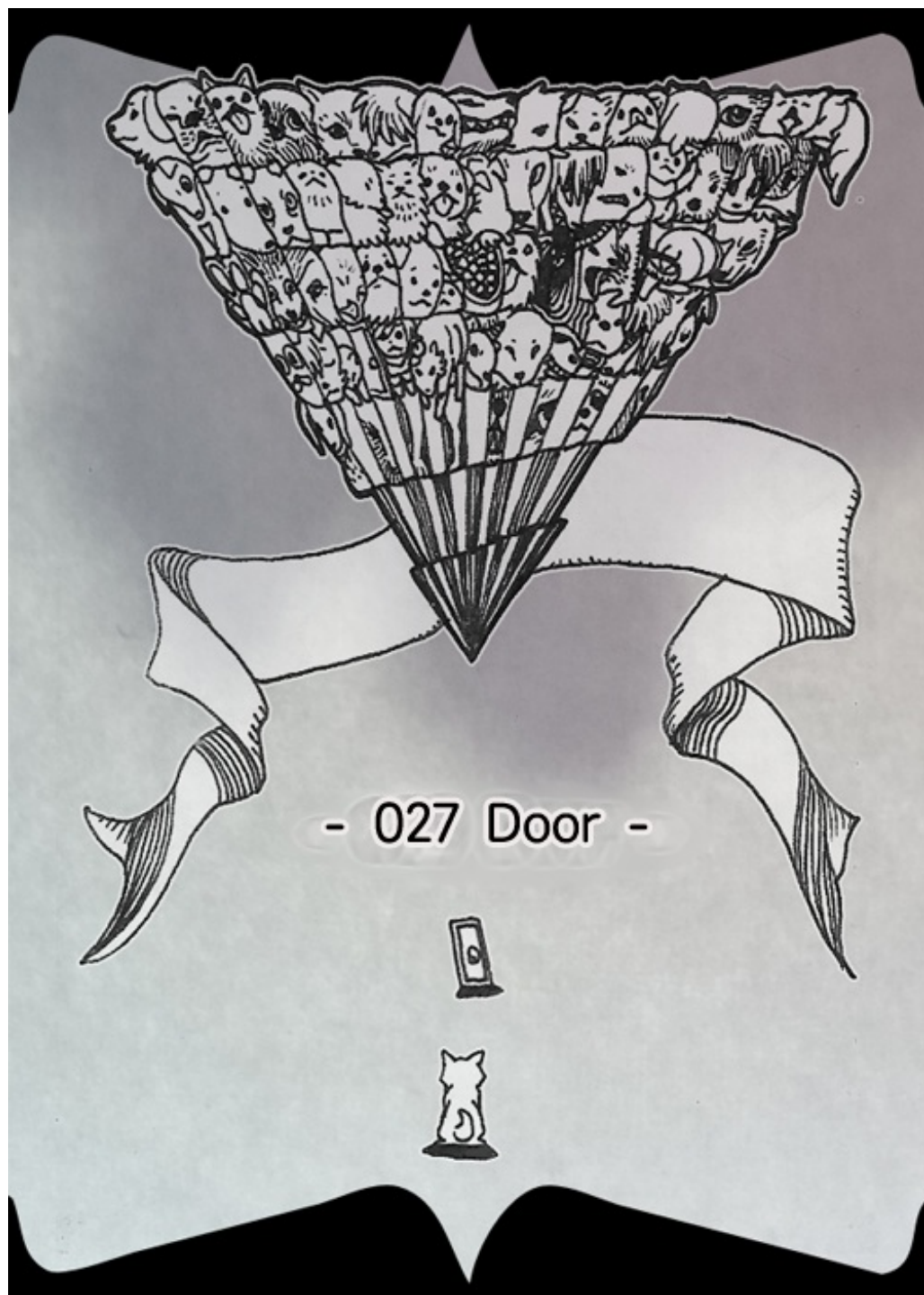
・ ・ ・



犬先生：夢の奥でする思いっきりの遠吠えも、なかなか乙なのである。



ラクシャさん：そういえば久しく していないや、遠吠え。



ただいま と ドアあけたら もう
へはっとした満面のお顔 とびついてきた
ぴょんぴょん跳ねて 尻尾もぶんぶん

見慣れぬ葉っぱがついているけど
そんな草 うちに あったかな？

いぬ ひと 原始のであいと、こしかた

どんな ひとときだったろう

すわっているもの
はしりさっていくもの

様々な姿 そのなか はざまに
不思議な犬さん 紛れている

透けたり 消えて出たり 炎の息を 吐いたり
異形 大小 魔法に翼 水の奥からも

ここにいながら そこもみている
すがたなくとも 遠くから声
何のためかは ひととはしらぬが
かれらは ゆきき するかもしれない

よぶと くるもの
まもり ほえるもの

どこかとどこかの はざまのところ

せなかまるくして 小柄な仔 ドアをみつめる
少し開き 光の中 げんきに駆け入り また 静けさ

怒り 唸るもの
親しみ ペロペロするもの

たくさんの名を持つ 動物ぶんの 不思議な動物
尻尾 丸い目 おやつおくれ の声
きみがなにでも きみがだいすき

・ ・ ・



犬先生：いやいやまだ私はコタツに潜行するのだ...ほれ、今月を50日くらい増やせば...



ラクシャさん：魔法で暦を変えない。さあ、もう帰りますよ。



犬先生：いやぁ、今年はいぬとこたつの師走であったなぁ。



ラクシャさん：う、うん いぬとこたつなのは 毎年だけどね...



犬先生：記念にコロのアペプさん人形と、楽しい迷宮夢を。ではまた12の月に...



ラクシャさん：僕からはㄐㄐのあったか紅茶と 穏やかな快夢を。では、よいお年を！

Thank you 2015,Let's go 2016!!

いぬせんずの おこたで空想犬

<http://p.booklog.jp/book/103071>

今年も 白黒 in こたつでした。
色んな不思議犬を入れようとしたら、
減ったり増えたり厳選カオスにっ
(おまけに犬さんでもなかったり)

でも、それだけ犬さんがたとの歴史 長いのですなあ
やっぱりわんこ かわいすぎるッ

それでは、また来年の１２月にて！
れつつ ふぁんたすていっく よきお年を！

著者：謡犬 ユネ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuneutainu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103071>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103071>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ